

今回は、8 月 18-19 日に行われました脳学習キャンプ in 信州について、東京都立多摩総合医療センター 歯科口腔外科の清水博之先生に報告していただきます。

脳学習キャンプ in 信州 2018 参加報告

東京都立多摩総合医療センター 歯科口腔外科 清水 博之

「こんなに楽しいのなら、去年も参加すれば良かった」

……思わずそう口にしたくなるユニークなイベント「口腔顔面痛 脳学習キャンプ in 信州 2018」が、2018 年 8 月 18-19 日（土・日曜）の 2 日間にかけて、長野県塩尻市の松本歯科大学で開催された。

察しの良い読者は冒頭の時点でお気づきになったかもしれないが、このイベントは 2017 年にも開催されており、好評につき、今年度も開催される運びとなった。今回はその魅力を読者の皆様にお伝えする機会をいただいた。若輩者の書いた短い紀行文と考えると、是非気軽に目を通していただきたい。



参加者全員での集合写真



実際の講義風景

天候にも恵まれ、気持ちの良い青空と共に迎えた初日。集合時刻の 13 時になると、本イベント委員長の金銅 英二教授からスケジュールの概要説明があり、そのあとすぐに脳や脊髄の基本構造等に関するレクチャーが始まった。

解剖実習を行うに当たって基礎的な知識が必要なのは言うまでもないのだろうが、脳の解剖実習という貴重な機会を大学卒業後に得られるとは考えてもいなかったものだから、講義を受けている最中も、次の実習への期待が高まるばかりであった。

60 分の講義を終えたところで、ついに地下の実習室へ移動する。

待ちかねた解剖実習の始まりである。

まずは献体を提供していただいた方々へ黙祷を捧げる。全員がマスクとグローブを装着して、デスク上のトレーに置かれた脳の標本と向き合った。1 つのテーブルにつき 2 人 1 組で、各方向からスライスした脳が複数提供されている。標本は、繊細に処理されており、



解剖実習の風景

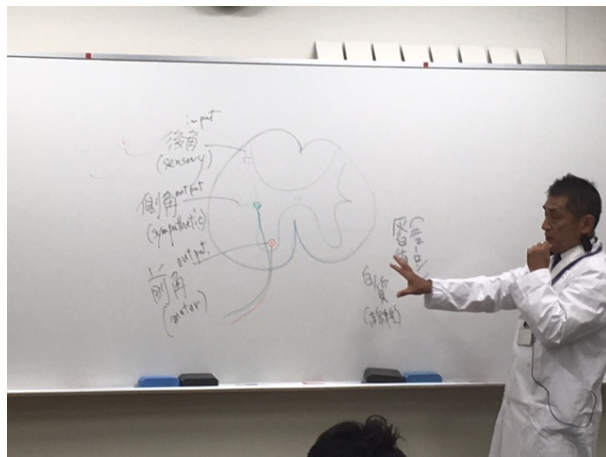


周囲の参加者との活発なディスカッション

臨床経験年数も肩書きも関係なく、皆が和気藹々と学習している様は、誰しものが知識を得ることを楽しんでいるようであった。こういった知への探求や興奮の光景が見られるのも、この学会ならではの光景であろうか。

初日に行った解剖実習の具体的内容としては、脊髄と脳の断面標本を観察するというものだった。12 脳神経の位置、太さや質感、また三叉神経中の運動根と感覚根を肉眼で見分ける方法を教わったほか、二次元では理解しにくい大脳基底核や各脳回の位置や機能などを確認することができた。

基本的な解剖構造について言及するのであれば、これらは概ね学生の頃に学習した知識ではある。しかしながら、実際に臨床に立ってから行う解剖の意味は計り知れないほど大きなもので、試験を突破するために学習をするのと、臨床という戦場で用いる武器を得るために学習するのとでは、全くの別物だ。卒後間もない筆者にとって、今回の講義は、新たな武器を得るための良き機会であったと言えよう。



金銅講師のレクチャー



今井講師による頭痛と口腔顔面痛の講義

そのうち 16%は抜歯されてしまうデータも存在していることから、この講義が我々歯科医師にとって大きな意味を持っていたのは勿論のことだが、その他にも遭遇する可能性のある頭痛疾患や、その際に用いる治療薬剤の奏効機序といった治療の根幹部分にまで触れていただけたことを考えると、これまた非常に有意義な講義時間であったと思うばかりである。

学生時代の実習よりも、明らかに質が良いものであった。

不明な点があれば、解剖学講座のスタッフにその場で細かく教示してもらうことが可能だ。ただし、質疑応答だけで終わらないのが、このキャンプの面白いところである。

たとえば、ある参加者がスタッフに興味深い質問をしていると、他のデスクにいた参加者が「自分も」と話に加わることで、議論が次第に熱を帯び始めるのだ。そこに脳外科医である北原功雄講師（千葉徳州会病院脳脊髄神経外科センター長）が臨床的な解説を加えることによって、今度は全員が「ほおお」と感心をする。そして納得した段階で、三々五々と自分のデスクに散っていく。そういったシーンが繰り返し見受けられた。

脳の解剖をひとしきり終わると、今度は今井 昇講師に（静岡赤十字病院神経内科部長）による、「脳の機能と頭痛のメカニズム」に関する講義が始まった。

今井講師は日本頭痛学会の理事も務められており、特に TACs（三叉神経・自律神経性頭痛）の臨床研究では大変ご高名な方である。歯科のセミナーでは類をみないほど専門的な講義であったが、先の解剖実習で学んだ知識と照らし合わせることで、長年の疑問が氷解していく様は、実に爽快であった。

群発頭痛を罹患した患者の 34%が歯科医院を受診し、



夕食を兼ねた懇親会

さて、キャンプと銘打っている以上は、楽しく寝泊まりすることが不可欠であり、むしろ義務と表現しても過言ではないだろう。これはキャンプなのだ。決して窮屈な勉強合宿ではない。楽しく知識を育んだあとは、最高の飯と最高の酒に限る。1次会は敷地内の中華料理店で開催され、前回も参加された先生の要望もあり、塩尻産の発泡ワインが全員に振る舞われた。

程よい酸味の後に鼻腔に広がるブドウの香りは上等である。また、食事も大学内とは思えない御馳走であり、緊張から解放された会場は参加者の楽しげな笑いで溢れていた。腹も満たされ、充分に有意義な1次会だった訳だが、まさかこれが序章に過ぎないとは、このとき筆者には思いもよらなかったのである。

2次会は場所を移して、参加者が宿泊するゲストハウスの一室で行われた。ここでもまた筆者は衝撃を受けることになる。誰も椅子には座らず、床やベッドに直座りだ。半分以上の参加者が初対面だったはずだが、2次会にもなると、ほぼ全員が酒を片手に話し込み、手を叩きながら爆笑するほどに打ち解け合っていた。いわゆる「宅飲み」という奴である。

ふと周りを見渡してみると、学術的な内容で盛り上がっている所もあれば、酔いにまかせて、人生を語り合う姿もあった。夜中の1時半頃には解散したはずなのだが、朝の4時近くまで杯を交わし合っていた参加者もいたとのことだ。



全員で乾杯。盛り上がりは最高潮に



二次会（宅飲み）の様子



普段は聞けないような話も飛び出した

余談だが、宿泊施設は非常に洗練されたもので、ビジネスホテルに宿泊していると錯覚しそうになる程であった。アメニティも充実しており、大画面のテレビも付いている。大変贅沢な宿泊環境だった。全てオートロックである。施設前にある中庭は自由に散策することが可能だ。なお希望によっては、シングルでの宿泊も可能である。

夜が明けて2日目、8時前に全員で学食に入り朝食を取る。キャンプらしさ溢れるところであった。そこでも、また侃々諤々と神経痛に関して議論が交わされていた。まだ2日目の講義すら始まっていないのに、とても夜半まで飲み交わしていた人間たちとは思えないくらい、エンジンが掛かりっぱなしであった。とにかく会話が途切れないのである。



宿泊施設（3人部屋）

二日目の解剖実習は、実物の骨模型と脳脊髄の標本を用いて、各脳神経の走行について金銅講師から詳細な解説があった。

その後、三叉/舌咽神経痛の MVD（後頭蓋窩微小血管減圧術：Microvascular Decompression）のオーソリティとして高名な北原 功雄講師による「脳神経ニューロパチーと外科療法」の講義が行われた。手術時の動画を用いて解説した上で、解剖室にもどり、脳の標本を自分の手で掻き分けながら、北原講師自らのレクチャーで全参加者が MVD のシミュレーションを行うことが出来た。

2日間にわたり、神経内科や脳神経外科の専門家に、こうも厚く教鞭を振るっていただけるとは、控え目に表現しても贅沢に過ぎる学習プログラムであった。これと同様なセミナーを行うことは、たとえ医科の学会でも困難であることは想像に容易く、このキャンプだからこそ実行可能なのだろう。

こうして、あっという間に1泊2日のキャンプは終了し、名残を惜しみながら松本歯科大学を去ることになった。帰りは皆でタクシーの相乗りをして、最寄り駅まで向かったのであった。

筆者が研修医のときに、しばしば師が「よく学んでよく遊ぶ」と口にしていたが、まさしくそれを体現したようなキャンプであったと言えよう。学術大会時のように、学会参加後は各々で居酒屋へ駆け込んだり、上司の前でかしこまる懇親会のようになったりすることもなく、最後は皆で遠慮のない自由な討論ができるよう考慮した学会イベントを開催してしまうところが、本学会ならではの温かみではないだろうか。

総括すると、本イベントは詰め込み学習をするような場ではなく、興味のある分野に深く触れるための、楽しい愉快的なキャンプなのであった。本学会のセミナーには概ね毎回出席している筆者ゆえの発言であるが、ベーシックセミナーやエキスパートセミナー等を受けていても、まだキャンプに参加したことのない学会員は、来年こそキャンプに参加することを強くお勧めしたい。



2日目、朝食の様子



北原講師による外科療法の講義

日本口腔顔面痛学会 News Letter へのお問い合わせは

「日本口腔顔面痛学会事務局」まで

〒135-0033 東京都江東区深川 2-4-11 一ツ橋印刷株式会社学会事務センター内

TEL: 03-5620-1953, FAX: 03-5620-1960 E-mail: jsop-service@onebridge.co.jp